発掘調査の概要

藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査
（飛鳥藤原第166次）

大和平野支線水路改修工事の事前調査として、藤原京左京七条一坊・八条一坊（橿原市上飛騨町）の発掘調査をおこないました。調査地は藤原宮に南面する「日高山」の東裾にあたり、北区（約155m）、南区（約29.5m）に二分して、幅２mという細長い調査区を設定しました。調査は2010年11月29日に開始し、2011年３月３日に終了しました。

北区では、左京七条一坊西南坪内の柱穴や左京八条一坊西北坪内の区画溝と思われる南北溝など、藤原京の時期の遺構を確認しました。

南区では、掘削開始直後から、多数の柱穴群を検出しました。狭い調査区の中で、大小入り交じった円形・長方形の柱穴が重複し、どれがどの柱穴と組み合って建物を構成するのか、頭を悩ませました。慎重に柱穴の前後関係や出土した土器の検討をおこなった結果、柱穴群には４時期以上の変遷があることがわかりました。

そのうち藤原京の時期には一辺１mを超える大きな柱穴をもつ掘立柱塀が建てられていたことが明らかになりました。調査区のすぐ東側には坊内道路（東一坊坊間路）が通じています。おそらくこの塀は坪内の施設と道路との間を区画していたのでしょう。柱穴の重複関係からは複数回の建て替えをおこなうなど、藤原宮と朱雀大路にほど近いこの地域において、活発な土地利用がおこなわれていたことがわかります。

今回の調査を通じて藤原京建設前後の土地利用の変遷を垣間見ることができました。地道な調査の積み重ねにより、古代都市藤原京の姿が少しずつ明らかになっていく、そう感じた調査でした。

（都城発掘調査部　小田 裕樹）

掘立柱塀の解体時に捨てられた土器（南から）